

歴史・文化の奥行き の深さとコンパクトな まちづくり

海と山を併せ持つ 自然豊かなまち

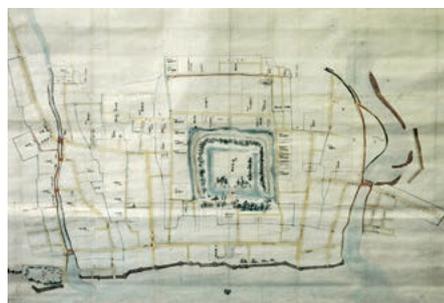
「蜃気楼の見える街」として知られる魚津市は、富山県の東部に位置し、県庁所在地である富山市から東へ約25kmの距離にあり、面積200・61km²、人口約4万人の地方都市である。本市は昭和27(1952)年4月1日、1町11カ村が合併し誕生。本年はちょうど市制施行70周年を迎え、これを記念したさまざまな行事を計画し、実施している。

地域の北西部は富山湾に接し、南東部は標高2000mを超える山岳地帯となっている。地域の大半(約7割)が標高200m以上の山地で占められ、人々の生活範囲は、海岸部に近い沖積平野と洪積

台地上に集中し、この傾向は、現代だけでなく、数万年以上前の旧石器時代から、その後の縄文時代以降の遺跡分布を見てもさほど変わっていない。

現在も残る街道の名残

近世(江戸時代)の魚津には、絵図などに北陸道が記載されており、そのルートもほぼ把握できる。



魚津町物絵図(魚津市立図書館所蔵)
江戸時代中期(1785年)の魚津町の様子を記した絵図。
絵図の中央に魚津城跡が描かれ、黄色に着色された場所は当時の道で、城を囲むような幅広の道が当時の北陸道。

魚津市長(富山県)

村椿

晃



現在の道路とは多少、位置や形は変わっているが、江戸時代の絵図と現代の地図を見比べても、その道筋や存在する寺院などの建物位置が基本的に変わっていないので、当時を思いをはせながらのまち歩きも可能である。これは本市のまち並みの誇るべき特徴といえよう。

魚津城の戦いから440年 —そして今—

主要な街道である北陸道沿いには、戦国時代、悲劇的な籠城戦として知られる魚津城があった。魚津城は、富山湾に面する平野部に位置し、陸路と海路を抑える交通の要衝にある平城である。この城を巡って、越後国の上杉軍と越中国の制圧を目指す織田軍による、80日間にも及ぶ攻防が繰り広げら

れた。最終的に城を包囲する織田軍によって落城するのだが、その前日に織田信長が京都の本能寺で急死したことから、織田軍は急きよ、自国へ撤退。上杉軍は再び城を奪還できたことから、あと数日持ちこたえていたら、その犠牲も最小限に抑えられていたかもしれない、と思ってしまうのは私だけではないだろう。

天正10(1582)年の戦いから今年で440年。魚津城の戦いを紹介した展示会が、この戦いにゆかりのある天神山城跡にある歴史民俗博物館で開催されている。本市へお越しの際はぜひご覧いただきたい。

蜃気楼ロード

「蜃気楼ロード」は、本市の海岸



旧大町小学校敷地内にある「魚津城址」石碑。周辺には解説板や模型などが設置されている。

線を南北に走る、県道、港湾道路を基本ルートとした延長約8kmの道路である。令和2年3月に国内144番目の日本風景街道として登録された。

本市の海岸は、古くから富山湾越しに蟹気楼を見ることができるとして登録された。気象条件がそろえば、3月下旬から6月上旬にかけて蟹気楼を見ることができ。その頃には、残雪の残る僧ヶ岳や毛勝三山から連なる北アルプスがびょうぶのように風景を演出し、街道を通る人たちの目を楽しませてくれる。

「蟹気楼ロード」は、世界で最も美しい湾クラブに加盟した富山湾でも有数の魅力的な景観であり、湾岸沿いに展開される「富山湾岸サイクリングコース」は、ナショナルサイクルートにも登録されており、本市の湾岸はその重要な一端を担っている。

美しい風景と地域資源

市のキャッチフレーズである「蟹

気楼」、海底に埋もれた約2000年前のスギ巨木の樹根で、国の特別天然記念物に指定されている「埋没林」、3月下旬に産卵のために沿岸を訪れ神秘的な光を放つ「ホタルイカ」の三つの景観を「魚津市の三大奇観」と呼んでいる。

三大奇観を保有する湾岸部には、蟹気楼が見える絶好のスポットである「みなとオアシス魚津エリア」があり、海の駅蟹気楼や埋没林博物館を訪れる観光客でにぎわっている。湾岸南部には、ホタルイカの飼育展示を行っている日本最古の水族館である魚津水族館があり、隣接するミラージュランドの観覧車(日本海側最大級)からは立山連峰や能登半島などの美しい風景を一望することができる。

美しい風景とサイクリング

これらの風景は、直径8km程度の圏内で臨むことができる。本市は、海から山まで多様な風景を短距離で楽しめる非常にコンパクトなまちと言える。その距離感から自転車でのサイクリングがちょうど良いのではないかと提案する。

本市では、令和3年9月にサイクリングの周遊ルートが完成し、

富山県で整備されている「富山湾岸サイクリングコース」、森・里山の魅力を楽しむことができる「田園サイクリングコース」、そして二つのコースを結ぶ「接続ルート」がコンパクトな距離感でまると楽しめる。また、風景を楽しめる時間が長くとれるのもサイクリングの利点である。湾岸部には魚、田園部には、リングゴヤナシ、ブドウといった特産物もあり、食へのアプローチもしやすい。さらにはウィズコロナ時代の趣味と

して、サイクルツーリズムへの関心が高まっている。本市の地形的な特徴と地域資源を活用する手段として、今の時代、サイクリングがとてもマッチしているといえよう。

古くからの北陸道(北陸街道)を出発点とした「蟹気楼ロード」から、田園、山へと道を延ばし、ウィズコロナ時代を見据えた観光振興、地域活性化を図ることにより、魅力的な街道、まちづくりを実現していきたい。

一口メモ

上杉、織田の攻防の道「北陸道」

律令時代の北陸道は、畿内と日本海側中部を結んでおり、国府間をつなぐ官道で小路と位置付けられていた。

江戸時代の道筋は、畿内から琵琶湖東岸の中山道(旧東山道)を進んで鳥居本または番場(米原)で分岐し、北上して日本海側へ抜け、そこから越後国へ至っていた。

神通川から黒部川の間北陸道には、東岩瀬、水橋、滑川、魚津、三日市の五つの宿場があり、魚津城のあった魚津は新川地域の政治経済の中心地となっていた。

北陸道(北陸街道)



企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」